

汲めども尽きぬ「生命の不思議」 ～福岡伸一・中屋敷均の筆の冴え

図書館係 阿部健治

百年に一度のパンデミック。新型コロナウイルスの蔓延は文字通り世界を震撼させ、私たち一人一人を大きく揺さぶった。「コロナとの戦いに勝つ！」という言説が飛び交うのもむべなるかな、と思わせる。

しかし、ちょっと待ってほしい。福岡伸一はもう少し冷静に、大きな目で見た方がいいということを教えてくれる。福岡は朝日新聞の文化欄に不定期で寄稿し、「ウイルスは私たち生命の不可思議な一部であるがゆえに、それを根絶したり撲滅したりすることはできない。私たちはこれまでも、これからもウイルスを受け入れ、共に動的平衡を生きていくしかない。」（波線、太文字は筆者による）と言っている。この「動的平衡」というのは、福岡が主著『生物と無生物のあいだ』（講談社文庫 2007）の中でも詳しく述べている重要な概念で、「生態系にしる、生命体にしる、およそ「秩序」というものは固定化すると脆いもので、それを守るためには絶えず壊し続け、再生し続ける方がよい」ということを指している。そして、そのために生命には自己複製システムがあるのだ。生命体は常に凄まじい勢いで新陳代謝を続けており、人間でも何か月かすると体を作り上げていた要素はすべて入れ替わるといふ。福岡はこのさまを「強風にさらされる砂浜で砂の城を維持し続ける」ことに例えている。文系の感性を刺激する実に卓抜な比喩だ。

こう考えれば、コロナウイルスも人間に「動的な」揺さぶりをかける環境の一部であり、それに対応してよりよき「平衡」状態を作り出していこうと努力するところに我々が生きている意義はあるということになる。

中屋敷均の『ウイルスは生きている』（講談社文庫 2016）は生物学系の書物としては、筆者の中では福岡の前掲書以来の久々のヒットであった。中屋敷の本は我々のDNAの多くがウイルス由来であるということを教えてくれた。要するにウイルスは我々のような多細胞生物の別働隊の働きをしているらしい。細胞内に蓄えておけるDNAの量は限られているので、外に出して泳がせておく（その間に変異によってより有用なものが生まれる可能性もある）。それを適宜受け入れて、動的な環境の揺さぶりに備える。それが生物の基本的なスタンスというわけだ。

ウイルス由来のDNAが我々に偉大な貢献をしてくれた例として、中屋敷は「胎児への攻撃を阻止するタンパク質を作り出す遺伝子」を挙げる。胎児は母体にとって異物であるから本来なら免疫系の攻撃を受けるはずなのだが、このタンパク質の働きによってそれを免れているというのだ。哺乳類はどこかの時点でウイルスからこの遺伝子を獲得したからこそ、哺乳類になれたのだ！この遺伝子はある寄生バチも獲得していて、自分の卵を芋虫に打ち込むときに一緒に入れるとか。だからこのハチの幼虫は芋虫の中で成長できるそうだ。

この例でわかるようにウイルスとの交流は、環境の揺さぶりに常に備える必要性がある我々には不可欠なことなのである。我々はウイルスというと凶悪なものばかりをイメージするが、大半は我々にあだを為すことなく共生していると言えるようだ。足女生諸君にもこの二著を読んで是非認識を拡げてもらいたい。

また、ここでもう一つ強調しておきたいのは福岡、中屋敷の文章家としての力量である。章立てもそのネーミングも本当にエレガントで、専門外の人間にもよくわかるように、見事な比喩を駆使して私たちを夢の世界に導いてくれる。そのわくわく感は、つまらないファンタジーなどの比ではない。

漫画と文芸のコラボ

～読み応え十分の諸作を紹介

図書館係 阿部健治

7月15日に第163回芥川賞・直木賞が発表された（表の面で既報の通り）。芥川賞の方は太宰治の孫にあたる石原燃（石原は太宰の妻石原美智子の姓）がノミネートされた。太宰が芥川賞がほしいと選考委員である川端康成に懇願して拒絶されたというのは有名な話だし、太宰の次女で石原の母である津島佑子も3度候補に上りながら未受賞（津島は2016逝去。海外では日本を代表する作家とも評価されており、芥川賞は新進作家の賞なので途中からはもう対象外になってしまった……）ということで、「ついに3代目でリベンジ受賞か」などと話題になった。筆者は作品そのものよりも話題性先行の受賞になったらちょっといやだな、と思っていたが、これは杞憂であった。受賞は**高山羽根子『首里の馬』・遠野遥『破局』**の2作。石原燃『赤い砂を蹴る』も含めて図書館で購入したので、どれが本当に良いか、読んで確かめてほしい。

直木賞は7回目のノミネートとなった**馳星周（はせせいしゅう）『少年と犬』**が受賞した。初ノミネートから23年目の受賞だと言う。馳星周は当初ノワール小説（ノワールとはフランス語で「黒」「闇」のこと。犯罪に関わるような闇の世界を描いた小説の意。『不夜城』シリーズが特に有名。）の名手として名を馳せ（！）たが、その後動物（特に犬）と人間の交流を描く作品（『ソウルメイト』シリーズなど）も手がけるようになり、今回もその系列の作品だった。特に「犬」が好きな人は読んでみるといいかもしれない。6回目のノミネートで恩田陸が受賞した時（第156回・2016年下期『蜜蜂と遠雷』）も、直木賞をとるのって本当に大変だなと思ったが、今期も改めてその思いを強くした。

芥川賞・直木賞作品がよいのは分かっているけれども、表現は難しいし、ちょっと長いもあるからなあ、と二の足を踏んでいる諸君。そういう人向けに、今回はいい情報を教えよう。こういう作品を**一流の漫画家**がコミカライズする、という素晴らしい文化が日本にはある。しかもそれが足女図書館に置いてあるのだ。これを利用しない手はないのではないか。どうだろう。足女生諸君。

その一つは、**三浦しをん**（今回から直木賞の選考委員になった）の本屋大賞受賞作『舟を編む』（2012）を栃木女子高校卒の漫画家**雲田はるこ**（代表作『昭和元禄落語心中』が第38回講談社漫画賞（2014）、第21回手塚治虫文化賞（2017）を受賞、同作はNHKでテレビアニメ、及びテレビドラマ（岡田将生主演）として放映された）が、これ以上はないほどのリスペクトを込めてコミカライズした作品（I T A N・講談社）である。三浦は、この作品を雑誌に連載するときの挿絵画家として当時ほとんど無名だった雲田を指名し、雲田もこれに応じて渾身の挿絵を描いた。この挿絵は残念ながら、本になった『舟を編む』には載せられていないのだが、筆者は『雲田はるこ原画集』で見ている。色付きで非常に精細に描かれており、素人である筆者にも雲田の思い入れがひしひしと伝わってくる作品であった（この原画集は足女にはないのです。ごめんなさい。）。

こういう経緯を経てのコミカライズであるので、雲田は原作を細部に至るまで全く改変していない。本当に忠実なコミカライズで、読んでいると、三浦と雲田

の絆（師匠と敬愛を持ってそれに応える弟子のような。いわば、杉本昌隆八段と藤井聡太棋聖の交流のような＝ちょっと脱線気味でごめんなさい。でもこれが実感なのです。）がこちらの胸に迫ってくるような感じなのだ。

『舟を編む』は辞書作りに打ち込む真面目人間（馬締光也というちょっとふざけた名前だが）を主人公にしている。この作品は本屋大賞受賞作だから映画化もされていて、映画では主人公を松田龍平が、その恋人役の林香具矢（かぐや姫をイメージさせるキャラ！）を宮崎あおいが演じている。宮崎はとてめかわいくて、慣れると（映画も何回か見ているので）魅力的なのだ（流石の演技力という感じもするし）が、最初は雲田の描く香具矢の印象が圧倒的に筆者の内部に住み着いてしまっていたので（流し目がすごいのだ。是非コミックを読んで確認して！）、すごく違和感があった。

このように、雲田は人物造型が素晴らしい上に、人物の表情の描き方が絶品。今も、コミックを手元に置き、いろいろな場面を確認しながらこれを書いているのだが、わかっていてもドキドキしてしまう。それほどの力がある漫画家はそんなに多くない。これを是非味わってほしいのだ。

もうひとつのオスズメが、最初にも触れた、**恩田陸の本屋大賞・直木賞ダブル受賞作『蜜蜂と遠雷』**を原作とする、漫画家**皇（すめらぎ）なつき**のコミカライズ版（幻冬社コミックス）である。恩田の原作はピアノコンクールに臨むコンテストタントの群像を描いたもので、設定そのものは『ピアノの森』（この漫画もいいですよえ）などでもおなじみのパターンであり、プロットの新奇さは全く感じられない。しかし、書く側にとっては、だからこそ難しいのだ。筆者は恩田のこの傑作を読むまでそれが全くわからなかった（恥ずかしい）。この難しさは実は「食レポ」の難しさと同じと言ってよい。彼らはすべて「美味しい」ものばかりをレポートするからだ。『蜜蜂と遠雷』のコンテストタントたちは皆天才であり、「素晴らし」くない演奏はない。ではどこがどう違うのか。その違いを言葉だけで筆者のような素人にどう伝えるか。これは本当に難しかろう。恩田はこの素材を創作初期からずっと抱えていたらしい。しかし、彼女はこの素材がどれだけ難しいかよく分かっていた。多くの経験を積み、いよいよいけそうだという感触を確かめ、満を持して取りかかったのである。

この作品が放出したエネルギーは凄まじかった。この作品は前述のように、本屋大賞・直木賞のダブル受賞作だが、実は恩田の2度目の本屋大賞受賞作でもある（最初の受賞は『夜のピクニック』（2005））。本屋大賞は書店員の投票で決まる文学賞で、当初は新人発掘の意味合いも強かったのですが、ベテラン書店員たちには『蜜蜂と遠雷』を推すのをためらった人もかなりいたらしい。それでもこの作品は圧倒的な票を集めて、2度目の本屋大賞作となったのである。

こういう作品をコミカライズするということになって、選ばれたのが「皇なつき」である。皇には京劇（中国の古典芸能）の俳優を主人公にした『燕京伶人抄』シリーズという名作があるので筆者は楽しみにしていたのだが、実物はそれを更に超えた出来映えだった。皇が描く人物たちはすべて、「ある空気」をまとっているのである。俳優を多く描いてきた皇だからこそできたことだろう。コンテストタントという「演者」を描くには最適の人選であった。

調べてみたら、皇は推理作家森博嗣の原作をコミカライズした『黒猫の三角』（2002）や宮部みゆき原作の怪談をコミカライズした『あやし 怪』（2010）を既に出版していた。実は早くから一流作家たちに認められた存在だったのである。

雲田はるこや皇なつきの作品ぐらになると、漫画とはいえ、明らかに文芸批評に耐えるレベルに達していると筆者は思う。日本の漫画文化の高さ、また、それに接することができる幸運に感謝するとともに、足女生諸君には是非こうした本物の「漫画」を味わってほしいと願うばかりである。

海外の評価がすすむ日本文学

図書館係 阿部健治

世界的に権威がある英国の文学賞「ブッカー賞」の翻訳書部門である「ブッカー国際賞」が8月26日に発表され、日本の作家小川洋子の「密やかな結晶」は最終候補6作品に入っていたが、惜しくも受賞を逃した。ブッカー賞はイギリスの文学賞だが、イスラエルのエルサレム賞やチェコのフランツ・カフカ賞などと並んで、これを受賞すると、次はノーベル文学賞の有力候補になると言われている。日本で最も世界に知られている作家村上春樹は後二者を受賞していることをもって毎回有力候補として挙げられるのだが、2017のノーベル賞選考においては、下馬評に背いて、日系イギリス人作家カズオ・イシグロが受賞した（イシグロは村上と親友であり、イシグロは父も母も日本人なので、彼のノーベル賞受賞が伝えられると、日本では微妙な空気が流れた）。そして彼は、1989に英国貴族邸の老執事が語り手となった『**日の名残り**』（原題：The Remains of the Day）により、35歳の若さで既にブッカー賞を受賞していたのである。イシグロのノーベル賞受賞によってブッカー賞の評価は更に高まった。

カズオ・イシグロの話が出たので、少し彼の作品の話をしたい。イシグロの作品の中で、日本で最も知られているのは2005のブッカー賞で最終候補にもなった（この賞は何度も受賞可能なのだ）『**わたしを離さないで**』（原題：Never Let Me Go）である。この作品はイギリスで映画化・舞台化されたが、日本でも、舞台を日本に移し替え、綾瀬はるか・三浦春馬の主演でテレビドラマ化された（蜷川幸雄演出、多部未華子主演の舞台もあるらしい）。ネタバレするとつまらないので詳しいことは言えないが、この作品はクローンにまつわる哀切きわまりない話で、社会的問題をも提起して大評判になった（宇都宮大学の古い建物が作品の舞台として用いられたことが話題になったりもした）。

しかし、筆者は先述の『日の名残り』の方が好きである。歴史ある洋館（というよりは城と言った方が近い）を取り仕切る老執事の花は、江戸時代の雄藩の家老のそれ（例えば伊達政宗に仕えた片倉小十郎のような）にも通じるものがあり、古き良きものを愛するという心性によって、日本人とイギリス人が深く通じ合えたと思えたからだ。父母ともに日本人であり、幼児期を日本で過ごしたイシグロがブッカー賞を受賞することには、このような大きな意義があったのである。また、この作品は1993に英米合作で、ジェームズ・アイヴォリー監督、アンソニー・ホプキンス主演で映画化されたのだが、この映画が実に素晴らしい。英国の洋館と言っても、小説では想像するしかないが、映画なら、この城とも言える洋館で使われる調度品の一つ一つが実物で示される（しかも磨き抜かれた映像で）。まるで、美術館の中にずっといるような趣で、その中で、ナチスをどうするかという国際会議が開かれたりする（私邸で国際会議というのがすごい!）。各国の代表はこの邸に招かれ、お茶を飲んだり、噂話をしたりしながら駆け引きをする。その間、老執事は粗相がないように、邸のマネジメントに全精力を傾ける。これを主演のアンソニー・ホプキンスが実に見事に演じている。せりふの味わいが伝わりにくい字幕の映画で、演技がうまいと初めて心から思えた。忘れられない映画の一つである。

カズオ・イシグロの作品は図書館に揃っているのです是非読んでみてほしい。

話を小川洋子に戻そう。彼女には多くの作品があり、図書館にも相当数揃っているのです、とにかく気に入った物を読んでほしいのだが、実は筆者はちょっと彼女が苦手なのである。

小川の作品は超現実的な設定が多い。今回ノミネートされた『密やかな結晶』にしても、主人公が、どんどん記憶が失われていく島（しかも人々がそれに全く気づかない）に一人ぼっちでいるというものだ。今気づいたのだが、こういうところは村上春樹に近いかもしれない。だから、村上春樹が好きな人には小川洋子は合うかもしれない（足女生にはハルキストはいるかな?）。しかし、筆者の読書は年とともに怠惰になってきて、最近は書き手に完全に身を委ねるというスタイルになってしまったので、こういうものに立ち向かうにはエネルギー不足を感じてしまうのだ。足女生諸君は若いのだから、こうした小川洋子的な作品にもチャレンジしてほしいが、ここでは比較的楽に読める本として『博士の愛した数式』を挙げてみる。この作品は**文系に数学の面白さを伝える**という面では右に出るものがない、特別な作品である。作中で「友愛数」（作品を読まない人は、せめてどういう数か調べてね）という聞き慣れない言葉が紹介されるが、何とも素敵なネーミングでそそられる。これで数学に興味を抱いた人も多かったのではないかな。

最近、海外で評価された作品と言えば、2018にエドガー（MWA：アメリカ探偵作家クラブ）賞の翻訳部門にノミネートされた**湊かなえ**の『**贖罪**』である。これも受賞には至らなかったが、とてもつながりそうに見えなかった人物同士が最後につながって事件の全容がわかる構成に新味があり、面白かった。湊かなえは「イヤミス（後味の悪いミステリー）の女王」と呼ばれ、血を見るのを恐れる筆者の肌には合わないとい前に書いたが、著書の他に映画やドラマもいくつか見たことによって、最近はかなり慣れてきた。今でもやはり血が流れるシーンが過剰な気はするが、それがメインなのではなく、人間をしっかりと描こうとしている（『**Nのために**』はよかった）のがわかったのです、読み応えを感じるようになった。

エドガー賞では、2004に**桐野夏生**が『**OUT**』で、2012に**東野圭吾**が『**容疑者Xの献身**』で翻訳部門にノミネートされたがいずれも受賞を逃した過去がある。桐野の作品は非常に面白くて筆者も大好きな作品だが、以前に書いたのですここでは述べない。東野の作品は堤真一主演で映画化もされたが、犯罪の動機が目新しく、しかもリアリティを感じさせる点（両者がともに満たされることは滅多にない）には大いに感心させられた。

また、2016にはイギリス推理作家協会の「ダガー賞」翻訳部門で日本人としては初めて**横山秀夫**の『**64（ロクヨン）**』が最終候補にノミネートされた。これもかなり話題になった作品で映画化もされ、アピール度の高かった作品である。横山の作品は「警察小説」と呼ぶ人もおり、警察組織と捜査員たちを描くことにも力点がかかっており、もしかするとイギリスではこういうものの方が好まれるのかもしれない、などと思ったりした。日本の読者でも、これが肌に合うという人はかなりいるだろうと思う。

さらに**中村文則**という作家も海外で注目を集めている。彼は2005に『土の中の子供』で第133回芥川賞を受けたが、更に2010には、『**掏摸<スリ>**』で第4回大江健三郎賞を受賞。そして、その英訳『The Thief』が、ウォール・ストリート・ジャーナル紙の2012ベスト10小説に選ばれたのだ。また、翌年には『悪と仮面のルール』の英訳（『EVIL AND THE MASK』）がウォール・ストリート・ジャーナル紙の2013ベストミステリーの10作品に選出。それらにより2014には、ノワール（ハードボイルド）小説への貢献で、アメリカでデイビッド・グーディス賞を受賞した。中村はカミュやカフカの影響があるとも言われるが、試しに評価が高かった『掏摸』などを読んでみるのもよいのではないだろうか。

実り多き東北の旅 ――ウイズコロナの修学旅行

図書館係 阿部健治

2年生と一緒に修学旅行に行ってきた。ウイズコロナの修学旅行で、ちょっと心配だったが、発熱する人も出なくて、本当にいい旅だった（みんな、すごく気をつけて過ごしたんだと思う。s わずがは足女生だ！）。

初日の災害学習はすごく勉強になった。仙台市の砂浜（海水浴場として知られた所だそう）にある荒浜小学校は4階建てだが2階まで津波が来たという。7メートルの津波だったが、多くの人が屋上に避難して助かったとのこと。よかった。津波の時にはとにかく高い建物へ。単純にそう思った。

しかし、次の南三陸町に行くと事情はずっと複雑だった。ここは湾になっているので、そうした地形では津波は増幅されて16メートル（！）にもなったというのだ。しかもその波が正面にぶつかって20メートルにもなり、跳ね返って上から降ってきたとか。それで15メートルの高台に立っていた中学校も被災したという。地元の人もしこに避難すれば絶対に大丈夫だと思ったらしい。そう考えるのも無理はない。実際に行ってみて筆者もそう思った。避難訓練の時に校長先生もおっしゃったが、こういう時に「かもしれない精神」を行動に移せるかどうかのカギだ。しかしこれは決して易しいことではない。

その日はこの町の「ホテル**観洋**」という宿に泊まったが、名前の通り、翌朝の日の出の海は最高に美しかった。これが毎日見られるとはなんと幸せなことだろう。しかし、これは「災害と隣り合わせの贅沢」なのだと強く思った。

2日目に行った松島（日本三景の一つ）もやはり湾だが、ここは湾の入り口にかなり大きな島があり、それで津波が減殺（「げん**さい**」と読む。少し国語の勉強を入れてみました。）されて、伊達政宗が整備した名刹「瑞巖寺」も足元が浸ったくらいだったらしい（そう聞かされてもピンと来ない。遊覧船に乗って湾内を見渡したが、島がいくら沢山あると言ってもまばらだし……。南三陸は湾が小さいからか。わかる人教えてください。）。しかし、そうは言っても**歴史的な被害**は大きかった。瑞巖寺は両側に樹齢400年（政宗が植えたということ！）の杉の巨木が並ぶ参道が有名だったのだが、これが津波による塩害でほとんど枯れ、植えたばかりの細い木に代わっていたのだ。巨木の切り株が残っているのが本当に痛々しかった。

2日目の午前中に行ったのが世界遺産の中尊寺金色堂だ。外側も内側もすべてに金箔が貼られていて、それを保護するために室町時代中期に鞘堂（覆堂）が作られたのだが、それまでもが重要文化財という極め付けの逸品。平安時代後期に、都から遠く離れた陸奥で、これほどのものができていたというのは驚異としか言い様がない。足女の2年生諸君は本当にラッキー（沖縄へは行けなかったけどね。「人間（「じんかん」と芦田は読んでいた）万事塞翁が馬」だ。ちなみにこれ、芦田愛菜の座右の銘だとか。）である。

筆者も中尊寺は30年ぶりくらいだったのだが、宝物館である「讚衡蔵」に入って、まず三体の丈六仏（仏像の基本サイズとして立像で一丈六尺＝4.8 mくらいというのがあるらしい。中尊寺のは座像なのでその半分の八尺＝2.4 mだそうである。）と対面して、そのすばらしさに打たれた。中央に阿弥陀如来、両側に薬師如来という並び方だが、両側の薬師如来が片方は金肌・黒螺髪（らほつ）で、もう一方が黒肌・金螺髪なのである。色の配合の妙にも感心したが、それ以前に仏の表情やたたずまいが本当によかった。筆者が見ている傍で、2年1組の生徒

たちの中から、家の人に、ここの仏様のお顔がとていいからよく見てきなさいと言われたんだ、という声が聞こえてきた。なんていいご家庭なんだろうと羨ましく思った。

千手観音や騎師文殊菩薩など、その他の仏様もよかった。書いているときりがなく、この辺にしておくが、どれも私たちが見慣れているものと違って少しエキゾチックな感じがあるようだ。この次は時間が十分ある時に来たいものだ。

中尊寺の参道（我々は帰り道としてそれを下っていったのだが）は月見坂と呼ばれ、両側に杉の巨木が立ち並んでいるの（誰かが日光の杉並木みたいだと言った）。これも伊達政宗が植えさせたものらしい。我々の旅は仙台城で政宗の騎馬像を見ることから始まった（この像は仙台という町の守護神のように見えた。仙台は政宗が作った町なのだ。）が、このような古寺への配慮も忘れない政宗の見識には本当に感心させられる。

中尊寺の後に見た毛越寺の浄土庭園。30年前の記憶はほとんどなかったが、今回はとてもよかった（筆者もあの世が少し近づいてますから）。大きな池を囲んで10以上のお堂のあとがあるのだが、それらが皆立っている風景を想像したら、さぞかし壮観だったろうと思えた。ここは平安貴族の寝殿造りを模しているという説明を読んで、ああそうか、寝殿造りは浄土庭園だったんだと妙に感心したりした。

こう書いてくると、今回の修学旅行は若い足女生諸君より、年取った筆者ら向けの内容と言えるものもあったかと思うが、皆もいずれ年をとるので、皆の心には将来への種を蒔かれたという経験になったのではないかと思う。とにかく、多くの人々の協力によって、無事に行ってこられたというのが何より有難いことであつた（良かったですね。久保田先生。）。

修学旅行のことを長々と書いてしまったが、これは「図書館だより」なので、とにかく本の紹介をしよう。筆者が今回皆に勧めたいのは、平泉の玄関口にあたる一関市（人口12万人。岩手県南部の中核都市）にゆかりの深い**内海隆一郎**である。内海は高校までをここで過ごし、小説家になってからもここに住んだことがあったらしい。地域に根ざした作家で、作中にもよく一関市（I市とか岩井町などと書かれているが）が登場する。あまり知られていないが、何度も直木賞の候補になった実力のある作家である。

内海の特徴は400字詰原稿用紙で11～12枚（文庫本で8～9ページ）程度の短編を300程も残しているということである。これらは「人々シリーズ」（短編集の題名も「**人びとの情景**」「**人びとの季節**」などである）と呼ばれ、市井の人々を扱い、最後には「人の善意」が明らかになるという共通の構造（「ハートウォーミング」とも言われる）を持っている。こう言うとな俗的な「お涙頂戴物」のように思われるかもしれないがそうではない。彼の小説には必ず「意外性」があるからだ。冒頭、一見奇矯に見えるある人物の行動が描かれ、それは周囲の人々に非難されたりもするが、その人の背景などが明らかになると、実はそれは**その人の善意の表れだったということがわかる**、というのが基本パターンで、その「意外性」の演出が実に自然で見事なのだ。

筆者が内海の作品を知ったのは「**彼の故郷**」という作品が、センター試験対策用問題集の題材になっていたからだ。これの解説をするために読んでいたのだが、教卓で涙が出そうになり、困った記憶がある。この他に図書委員も薦めている「**芋ようかん**」や「**木綿豆腐**」、「**相棒**」などが高校教科書に採用されているようだ。どれも読みやすく、読書が苦手の人にも是非勧めたい作品群である。

内海の作品は数多く出版されていたが、近年ほとんどが絶版となり、今回も図書館で買うことができなかった。わずかに、内海の代表作を谷口ジローがコミック化したものだけが買えた。取りあえずはこれを読んでほしい。

偏屈者（へんくつもの）を労（いたわ）ってくれる人

————— 木内昇『新撰組 幕末の青嵐』を読む

図書館係 阿部健治

昨年12月のある日の放課後、読書好きでよく図書館にも来る一人の3年生が、「先生、これについて書いてください」と言って一冊の本を持ってきた。その本が副題にも掲げた木内昇（きうちのぼり）の『新撰組 幕末の青嵐』である。この作者、名前の字面からすると男性のように思えるが、名は「のぼる」ではなく「のぼり」と読み、女性作家である。木内は2011年に『漂砂のうたう』で第144回直木賞を受賞した実力作家だが、その頃、あまり真面目に読書していなかった筆者は寡聞にしてよく知らなかった（要反省だ）。その木内の鮮烈なデビュー作が、2004年に発表された、この『新撰組 幕末の青嵐』なのである。

「新撰組」と言えば、局長の近藤勇（いさみ）、副長の土方歳三（ひじかたとしぞう）、そして、結核という宿痾の病で若い命を散らした悲劇の剣士沖田総司らがあまりにも有名で、今や多くの小説、映画、TVドラマ、更にはコミック等にまで登場して大モテのキャラクターだが、かつてはそれほど知られた存在ではなかったらしい。彼らを世に知らしめたのは1964年に世に出た、司馬遼太郎の『燃えよ剣』（土方が主人公）と『新撰組血風録』（新撰組についての連作短編15編）である。この頃の司馬は恐るべき馬力で書きまくっており、これまた「国民の坂本龍馬像」を確定させたとも言える『龍馬がゆく』（1963-1966.）や下克上の代表である斎藤道三とその女婿織田信長の二代を描いた『国盗り物語』（1965-1966）なども上梓している。後者は筆者が中学二年生の時の愛読書で、五、六回繰り返して読んだ記憶がある。その中に、後の道三こと松波庄九郎が京都の油屋の後家を有馬温泉に連れ出して誘惑するシーンがあったのだが、同級生に「すげえんだ、ここが」などと騒いでいたら、謹厳な担任の女性国語教師に取り上げられたこともあった（今から思うとどうということもない描写だが、当時の中学生にはとっても刺激的だったのだ）。司馬遼太郎は晩年になると、小説家というより文明史家に近づいていった感が強く、『空海の風景』（1973-1975）や西郷隆盛らを描く『翔ぶが如く』（1975-1976）などでは、小説は彼の史観（よく「司馬史観」と言われる）を盛る器のようになった。それはそれで味わい深いのだが、少々寂しくも思う。何しろ1965年ころの彼の作品は、世間にあまた存在するストーリーテラーたちをすべて薙ぎ倒し、蹴散らしてしまうというくらいの勢いで、滅法面白かったからである。

木内も『燃えよ剣』を読んで、その面白さにひっくり返ったクチだろう。それで土方歳三に傾倒し、彼について自分なりにいろいろと調べたのだろう。そうこうするうちに自分（だけ）の土方が描きたくなった…。デビュー作に「新撰組」を選んだ経緯はそんなことだったのではないか。

木内がすごいのは、それが独善的にならなかったことだ。『新撰組 幕末の青嵐』は他の小説とは大きく違った構成をとっている。全体が「遠景の光」（京に上る前のこと）、「足下の薄氷」（初期新撰組の危うさ）……といった六章に分けられ、それぞれが6～10人ほどの異なった登場人物の視点で別々に描かれていくのである。つまり、上京する前、土方は、近藤は、沖田はそれぞれ自分自身をどう見ていたのか、それが列挙され、次々に積み重ねられていくことになる。

このことにはどんな意味があるのか。多くの視点から描かれるので、人物は自ずと立体的になる。土方自身が見る土方、近藤が見る土方、沖田が見る土方、それらはもちろん似通ったものではあるが、微妙に異なる部分もある。これは、音楽で言えば、数多くのスピーカで聴く（音声多重）ようなものである。音楽の批評などでもよく「音が立体的になった」などと言うではないか。

こういうやり方は、「似て非なるもの」を際立たせるのに向いている。「新撰組」はもともと剣技に優れた者の集まりだが、その中でも特に腕が立つのは齋藤一（はじめ）、永倉新八、沖田総司の三人だろう。彼らにとっては、いかに剣技を磨くか、いかにそれを生かすかが第一義なので、新撰組の中で成り上がろうといった野望は（あまり）持たない。では彼らは皆同じかと言うとそうでもない。沖田は病のせいもあるが、名利への思いはゼロで、ただ「純」な人を感覚的に嗅ぎ分けて近づいていく。面白いのは沖田が土方と山南敬助の双方に慕い寄っていったことだ。土方と山南は犬猿の仲である。山南は博学の上に気がよくて人をそらさない所があり、そういう所がいちいち土方の気に触るのだ。果断をもって鳴る土方は、山南が優柔不断な面を見せるとすぐに噛みついていくのである。新撰組を結成してから万事を取り仕切っていた土方は、山南を「総長」という閑職にまつり上げ、実務から遠ざけた。自らが無用者であることを悟った山南はわざと脱走して、土方に自分への切腹を命じさせる。沖田はたんとと両者に接し（どっちも好きなのだ）、万感の思いで山南の切腹を見届けるのである。

沖田と比べると、齋藤と永倉の違いはかなり微妙である。ともに土方に深く信を寄せていたと思うが、永倉には納得できないことについては黙っていられない癖があった。だから土方も永倉が文句を言いそうな仕事はあえてやらせなかった。それと比べると、齋藤はすべて訳知りという感じで土方に従った。後に新撰組に入ってそれなりの勢力を作った伊東甲子太郎が、仲間を引き抜いて出て行き、「御陵衛士」という新集団を作った時も、齋藤は躊躇なくそこに加わり、土方のスパイという汚れ役を引き受けた。齋藤には「義がいずれにあるか」よりも「（たいへんな）任務の遂行」を自らの使命とし、それを喜ぶという風があった。恐らく土方と最も相性がよかったのは齋藤だろう。

木内は清河八郎や芹澤鴨といった、新撰組前史、または新撰組初期に関わった人物で、ドラマなら早々に退場しそうな者たちにもそれなりの紙幅を割き、彼らの面目が立つようにしてやっている（司馬の小説では印象に残らなかった彼らの立場が木内のを読んだらよくわかった）。こういう中立的な姿勢は全体を俯瞰しやすい構成の賜物とも言えるが、筆者には「どんな人にもそれなりの存立基盤はあるはずだ」という彼女の信念の発露だと思えた。木内は「世をすねた人（偏屈者）」が好きで、彼らに向ける労りの目というものがあるが、筆者にはそれが何とも好ましい。清河八郎や芹澤鴨も大きく言えばこの範疇に入ってくるだろう。

ただ、そのように努めていても、やはり彼女にとっての一番は土方である。彼女の描く土方は、新撰組を引き締めている時期は鬼となっていたが、戊辰戦争に突入するとすごく柔らかく優しくなる。ああ、これはツンデレなんだと筆者は思った。土方とはまわりのすべての人々に対して等しくツンデレな人。これが描きたかったんだ。そう思った。この本に書かれているのはもちろんすべて史実に基づいているだろうが、どの資料を捨てどの資料を拾うかで人物の印象は大きく変わる。あれほど公平に、冷静にすべての人物を見ようとしていた木内が、主人公とも言える土方歳三に対しては、少しだけ冷静さを欠いたのではないだろうか。もちろん、木内が提出したナイーブな土方も十分に魅力的である。そして、多摩地方の田舎臭さ（『燃えよ剣』では冒頭で「蝮臭い」と表現される）や男臭さを身にまとった、司馬が描く土方像もまた魅力的である。足女生の諸君も、この機会に、歴史的人物の中でも屈指のイケメンとされる「土方歳三」の本当の姿をそれぞれに探してみたらどうだろうか。

アイドルが文学を生み出す時代

———— 『オルタネート』と『推し、燃ゆ』

図書館係 阿部健治

図書委員の紹介にもある通り、2021 年の本屋大賞ノミネート作品が発表された。この 10 作は書店員さんたちが特に読んでほしいと公的に表明（投票）した本のベスト 10 であり、それぞれに面白さのあるものだと思うが（足女図書館に揃えたので是非読んでください）、今回はその中から**「アイドル」が生んだ文学**ということで、**加藤シゲアキ『オルタネート』と宇佐見りん『推し、燃ゆ』**について語りたい。

まずは加藤シゲアキの『オルタネート』。加藤はアイドルグループ「NEWS」の一員であるから、これは文字通り「アイドル」が生み出した（かいた）作品である。「NEWS」は当初は9人もいたそうで、山P（山下先生のことじゃないよ）や関ジャニの錦戸くんなどもいたらしい（近いところでは、手越くんもいたよね）が、今は加藤くんと小山くんと増田くんの3人だけになっているらしい。筆者は「アイドル」などには疎いが、SMAPや嵐やTOKIOのメンバーなら全員言えるし、小山くんと増田くんも顔はわかるのだが、加藤くんはテレビでも見たことがない。とすると、「NEWS」の中でもその存在は地味な方なのかもしれないが、小説家（エンタメの）としては、間違いなく指折りの人（アイドルとしての序列よりはたぶん上）だと思う。この作品もこのまますぐにテレビドラマの原作になってもおかしくない。登場人物のキャストは誰がいいかなあ、などと思わず想像させるくらいの力がある。

本作成功のカギは、やはり「オルタネート」という「**高校生向けのマッチングアプリ**」を構想したことにあるだろう。マッチングだから向こうには未知の相手がいるわけで、もちろん危険性も感じる（だからマッチング自体は敬遠する高校生も多いとも描かれる）が、同時に期待感も大きい。しかし、このアプリは高校生しか使えないので、大人にだまされる危険はかなり軽減されている。また、自分は発信しないでオブザーバーのように参加するのも可能なので、それで楽しんでいる者も多い。この辺の設定はとても巧みであり、エンタメ作家としての熟練性を感じる。

この作品には主人公格の人が三人いるのだが、そのうちの一人風津（なつ）は両親の不仲（「マッチングの失敗」ということ）を見て、その轍は踏みたくないと心に決め、自らの遺伝情報まで「オルタネート」に提出して「Gene Match（遺伝子的な相性診断）」にまで挑む。これはいかにも実用化しそうな話なので、筆者はぞぞっと寒けを感じた。

足女生の諸君、こういうの、どう思いますか。

AIには学習機能があるので、意味のある情報が揃っていれば、ある程度適切なマッチングをすす可能性が高い。しかし、それを黙って受け入れていいのだろうか。相手とは合わないところを発見し、それをもとに自らを振り返ったり、相手に働きかけたりしてそのギャップを埋めようと努めることが「生きる」ということなのではないか。更に言えば、遺伝子的に相性のよいマッチングが多くなされることはヒトという種にとって、あるいは全生態系（あるいは地球）にとって本当によいことなのだろうか。こんなことを考えさせてくれるだけでもこの作品

は価値がある。

作者はもちろん風津の行為を手放しで肯定していわけではない。ではどうとらえているのか。それは是非結末まで読んで諸君自身で確かめてみてほしい。

主人公格の残りの二人のうち、尚志（なおし）は風津と対極的な人物として設定されたものだ。高校を中退したため「オルタネート」も使えなくなった。そのため、彼は自分の「感覚」だけを頼りに、常に体当たりで自分の人生を切り開いていく。そしてもう一人の主人公格、ヒロインとも言うべき蓉（いるる）は名前の通り「受け入れる性（さが）」なのだろう。親や友や恋人とは共感と同時に反発も感じるのだが、もがき苦しみながらもそれを乗り越える。穏やかそうに見えるが芯が強い。このキャラクターもとても魅力的だ。この独立した三つの話が最後に微妙につながっていくラストには新鮮みも感じた。楽しめる作品だと思う。

宇佐見りんの『推し、燃ゆ』のは、より「アイドル」の本質に迫った作品だ。

「推し」とは個人的に応援しているタレントのことを指すらしい。我々の世代だってみな好きなタレントはいたが、ここで描かれる「推し」は、その「のめり込み」の度合いが全く異なる。ある意味、「推し」を「推すこと」が主人公あかりの**全て**なのだ。彼女は何をやっても姉のようにうまくはできず、当然勉強も苦手だし、「推し」を応援するために目一杯やっているバイトでも失敗ばかりである。そういう彼女が、「推し」に関しては、文学研究者が作家の日記の隅々まで読むような手つきで、彼に関するあらゆる情報を集めようと努め、誰も気づかないようなことを発見してブログに書く。すると、それは「推し」仲間の絶賛を浴びたりするのだ。

今の若者は幼い事から「自分らしく」生きることを強制される。しかし、「社会的にも価値のある自分らしさ」を持っている者などそうそういるはずがない。だから 多くの若者はそういう「自分さがし」にととても疲れているのだ。

「アイドル」は、個人的な思いを寄せることもできる上に、多くの者に支持される「**社会的価値をも有する**」から、それを自らの一部とし、自分のアイデンティティの拠り所とするには、最もふさわしいものだと言うこともできる。**主人公あかりは「推し」を自らの「背骨」だと言う**。彼女は「推し」に対して自己をアビールしようとしないうし、彼からの返答も求めない。それこそ「推し」が他者でなく自分の一部だということを証明するものであろう。

「アイドル」はもともと「偶像」や「理想」、あるいはそこから派生した「幻」などの意味を持つ。あかりの一部をなす「推し」は、文字通りこういう意味での「アイドル」なので、彼が備えている（はずの）肉体は、時として邪魔になることさえあるのである（あかりは彼が歌ったりダンスをしている姿は見たいが、彼の匂いや息づかいを感じたいわけではないのだ）。

翻って考えれば、人が自らのアイデンティティとするものは、多くの場合、イデアルな（「心」のように形がなく理念化した）ものである（ボディビルダーのように肉体そのものが「自分」だという人もあろうが少数だろう）。人は誰でも肉体に縛られて生きているのだが、真に大切なのはその部分ではない。

「アイドル」は「アイドル」でいるうちは、**自分という存在の多くを公的空間に差し出している**わけで、それについてのファンのアクセス（よほど不当なものでなければ）を絶対に拒否することができない。しかし、彼が「アイドル」でなくなった瞬間から、それがどんなに心のこもったものであろうが、ファンからのアクセスは完全に拒絶される。

あかりの「推し」であった上野真幸はファンを殴って炎上し、やがて「アイドル」であることをやめて「**人**」になった。そうになると、あかりの最も大切な部分は自然消滅せざるを得ない（虎になった李徴の中に残された「人間」のようなものだ。どんなに身をよじって嘆き悲しんでもどうにもならない。）。「推し」や、それを可能にするSNSにすぎなければ生きていけない若者の姿を見事に描き出した本作は、まさに「現代の文学」と呼ぶにふさわしいものであろう。

「マンガみたい」なままではいけない

————宇佐見りんの今後

図書館係 阿部健治

宇佐見りんは1作目の『かか』で「文藝賞」と「三島由紀夫賞」を、2作目の『推し、燃ゆ』で「芥川龍之介賞」を受賞した。芥川賞を受賞した時は21歳で、これは、16年前の2004年（平成16年）に19歳で第130回芥川龍之介賞を受けた綿矢りさ（受賞作『蹴りたい背中』）と、綿矢と同時受賞で当時20歳の金原ひとみ（受賞作『蛇にピアス』）に次ぐ年少記録である。

世間というのは、常に「記録更新」とか「無敗（宇佐見は2作発表で3つの文学賞を受賞）」といった神話を待望しているものだ。「マンガ」は特によくそれを伝えてくれるものだが、面白いことにそういうマンガが世に出ると、それを追いかけるようにそっくりの現実の存在が現れるのだ。その最も顕著な例は、浦沢直樹の出世作『YAWARA!』（1986～1993雑誌連載）と谷（旧姓田村）亮子（1992に高校2年生でバルセロナオリンピック銀メダル、以下オリンピックに5大会連続出場し、金メダル2個、銀メダル2個、銅メダル1個を獲得）の関係だろう。田村はマンガにちなんで「やわらちゃん」と呼ばれたが、本名よりその名の方が自然なほど「YAWARA」そのもののような感じだった。

また、もともとはライトノベルでコミック化、アニメ化もされた『りゅうおうのおしごと』（2015～現在進行中）は将棋の世界を扱ったものだが、執筆開始当時、10代で将棋界最高のタイトル「竜王」を獲得するという設定は「ありえない」と批判されることが多かったという。第1巻が出た当時、藤井聡太は奨励会（プロ棋士の下部組織）の二段だったが、翌年、史上最年少の14歳2カ月で中学生棋士（四段昇段＝プロ入り）になると、いきなり無傷で29連勝し、昨年には18歳で「棋聖」「王位」の2冠を獲得するに至った。『りゅうおうのおしごと』の原作者白鳥士郎も「自分の主人公も最初は連敗して苦しみという設定で、デビューから土つかずという記録は想像を超えており、フィクションでもそこまでは書けなかった」と述べている。フィクションのリアリティがそれに続く「現実」によって補われるというのは驚きだが、「事実は小説より奇なり」というように、時としてそういうことも起こるのである。

こういうことを書いたのは、宇佐見りんにも同様の現象が指摘できそうだったからである。『響～小説家になる方法～』（2014～2019連載完結）というマンガで出た。作者は柳本光晴という人で、2017には「マンガ大賞」を受賞。コミックスの累計発行部数は233万部以上、2018には元樺坂46の平手友梨奈主演『響-HIBIKI-』のタイトルで実写映画化もされている。この中で、平手演じる主人公「鮎喰響（あくいひびき）」は高校生ながら投稿した処女作が芥川、直木両賞の候補になり、二つを同時受賞するのである（対象作品の定義が異なる両賞の同時受賞は、実際にはありえないと思うが…）。

宇佐見は21歳の大学2年生で、上記のように「史上3番目の若さ」ということだが、綿矢・金原の作品は16年も前なので、やはりインパクトは大きかった。しかも、2作で3賞を受賞（「文藝賞」は「応募」だが、「三島賞」は主催出版社がその期間に出版されたものの中から選んで候補とするものだから同時受賞が可能なのだ。）し、ハズレなしというのはすごい。また、純文学なのに「推しにのめり込む主人公」という「今日（サブカル隆盛の）的」テーマを描いて世間へ

のアピール度は満点であり、まさに「**リアルひびき（響）**」（谷亮子が「リアルやわら」であるのと同じくらいに）とでも呼びたいほどの圧倒的な存在感である。

こうして注目されるに従って、彼女の周辺もかなり報道されるようになった。宇佐見は中高一貫校に在籍して、現代文では梶井基次郎の『檸檬』を一年かけて読むような（特別な）授業を受け、その先生に大きな影響を受けたと言う。そして具体名は秘しているようだが、今はかなり有名な大学に在籍しているそう。絵に描いたような成功物語である（マスコミはそうに扱っている）。まずはこれを「**マンガみたい**」な**成功**と呼んでおこう。俗な受け取りではあるがわくわくするのは事実。これも彼女の魅力の一環である。

「マンガみたい」な成功は、他の分野の人間ならまだ危険度は少ない。例えば、将棋の藤井聡太は、ただひたすら将棋が強くなることに打ち込めばいい。あと少しだから高校は卒業した方がいい、などと言われても、今は将棋に打ち込む時間が何より貴重だという**自分の感触**を信じ貫けばいい（コロナ禍の臨時休校以降の、彼の将棋の「伸び」は凄まじかった。ここで「時間の貴重さ」を実感したのだろう）。打ち込む対象がはっきりしていれば迷いは少ない。しかし、「文学」になると、ことはそう簡単にはいくまい、と筆者は思っている。

小説は作家の「生」の全体から生まれてくるものだ。特に純文学（「三島賞」や「芥川賞」はこれが対象の賞だ）はそう。良くも悪くも「自分」を切り売りするのが純文学なのだ（エンタメ小説にだって、作家の「生」は反映するだろうが、こちらはある程度切り離して作品を書き続けていくことも可能のように思われる）。だから、「平穏すぎる生活」や「チャホヤされすぎる状況」からは、読者の心を強く揺さぶるような「やむにやまれない（書かずにはいけない）もの」は出て来にくいと考えられるのである。

宇佐見は、中上健次が好きだと各所で語っている。中上は1975（昭和50）に『岬』で芥川賞を受賞した作家で、紀州熊野（あの世の入り口と言われる場所）の風土と宿命とも言える複雑な家庭事情（私生児として生まれ、異父兄妹がたくさんいて、母の再婚相手及びその連れ子と一緒に暮らす、というような）から生まれた、土と血の匂いがする文学を一貫してかいたという人である（代表作『枯木灘』は日本文学の到達点の一つという評価もある）。実際、宇佐見の処女作『かか』には彼の影響が顕著である。主人公「うー（うさぎ）ちゃん」は母に強く依存（文字通り「一体」の母子関係）しながら、同時にどうしようもない違和感にもさいなまれ（これは子を産む「女」という性そのものへの違和感にもなる）、手術を控えた母を残して、一人で熊野に旅立ったりするのである。

すぐれた文学にはすべて中上のように過酷な経験が必要だとは言わないが、自分を捨てた実父へのうらみや、それを源とする自分の「血」への嫌悪感などは経験した者でなくてはわかるまい。そういう意味で、筆者は宇佐見の「マンガみたい」な成功に危惧を感じるのだ。『推し 燃ゆ』の主人公「あかり」は高校もやめ、バイト先もやめ、唯一の心の拠り所だった「推し」も失う。もちろん、宇佐見の現実の「生」の中にもこういう影の部分はあろうが、あまりにもギャップが大きすぎるのではないかと、どうしても感じてしまうのだ。

宇佐見は受賞のインタビューで、「まだ、芥川賞をもらう予定ではなかった」という趣旨のことを言い、周囲を驚かせたが、これは『推し 燃ゆ』という作品の欠点はよくわかっているので、執筆中の第3作でより良いものを書き、これで勝負したいという意味だったらしい。そういう話を聞くと、「マスコミの寵児」にまつりあげられても、それでペースを乱すようなことはなさそうだが、それにしても若くしてこれだけの達成をすると、ハードルはますます高くなる。宇佐見には、「書き言葉には誠実でありたい」という「受賞のことば」を最後まで裏切ることなく進んでほしいと願うばかりだが、これは相当に困難な茨の道である。